とある平和の番外通行

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある平和の番外通行

【Ｎコード】
Ｎ９７６８Ｙ

【作者名】
久留間水樹

【あらすじ】
番外個体×一方通行。原作を読んでいる人しかしらないもう誰得？（いや俺得！）な作品です。つまり自己満、ひゃっほう。あの戦争から１週間後からスタートです。私の好きなキャラがいっぱい出てきます。自己満ですから。あと本編一切無視。だって普通に無理だもの！どう合わせろと！そんな小説ですが楽しんでいってくださいまし。

１－１　番外個体と一方通行。（前書き）

ミサカワースト大好きすぐる。

1―1　番外個体と一方通行。

「どういうことなのかにゃーん？」

第三次世界大戦終了1週間後、一方通行（アクセラレータ）は番外個体（ミサカワースト）に笑いながら揶揄されていた。

理由は明白である。

彼が、女物の服をかってきたから――ではなく。

「……うるせェ、服がねェとかほざいてたのはテメェだろォが」

一方通行がいうと、番外個体はにやにや笑って

「だからといってそれはないとミサカは思うけどなあ？」

番外個体が指を差す先――つまり、一方通行の手のなかにあった“女物”はなぜか、チャイナ服ばかりだった。

一方通行は舌打ちをする。

「アァ？文句あンなら着るンじゃねェ」

「いやいや、このイイコのミサカさんはぜーんぜん文句を言わずにありがたーく着ますよっと」

悪意満面の笑みで番外個体は一方通行の手のなかにあるチャイナ服を奪い取った。

そしてその中の一着を広げ、自分の体の前に合わせ

「似合う？」

「死にやがれ」

つまんないなあもう、と番外個体がぶーたれるのも構わず彼は部屋の奥に入ってしまった。どうせソファーに横たわるだけのくせに。番外個体は所在なさげに数秒ぷらぷらチャイナ服をはためかせ、洗濯機に入れる。今はいない胸があり得ないことになっている教師か、こちらも自分の“姉”と現在外出中でいない無職のおねーさんかどちらかが帰ってきたら洗ってくれるだろう。

……そう。

現在、番外個体は一方通行と二人きりでお留守番なのだった。

「あーっあ、ミサカ、暇潰しにあの人殺しちゃおうかな」

そんな物騒なことを呟き、番外個体はむぅ、と頬を膨らませた。暇だ。

自分より背と精神年齢の低い“姉”――打ち止めが残っていればゲームでもできたのに、とムカついたのでビリビリ紫電を散らす。

その時だった。

「オマエ、これからどォすンだ？」

奥から声が聞こえた。この家には今自分しかいない。必然的に、話しかけられているのは自分だ。

それを理解した番外個体は皮肉気に口角を上げて笑い、

「さあね。暗闇も終わった。てことはミサカもしかして用済み？傷ついちゃうにゃーん」

「そンなン何世紀も前から分かってンだろ」

「にゃはは、正解」

番外個体は笑い飛ばすようにまた笑った。――が、一方通行の顔

が本気なのをみて――少し、黙った。

「何？親御さんついにはミサカの親御さんまで担当することにしたの？」

「ふざけンな。誰がするか」

「確かにね。――で、そういうあなたは決まっているの？」

番外個体は答えを期待していなかった。彼は“今生きる”ことだけを見続け、“日常”を勝ち取った人間だ。だから、“先を見据える”なんてこと、できるわけがない、とたかをくくっていた。

――が、その答えは番外個体の予想を大きく外れ、同時に精神を揺さぶった。

「あァ、――学校に、通おォと思ってる」

「――、」

番外個体は言葉が詰まり――何も言わなかった。

否、言えなかった。

学校。

番外個体が、どうしても手に入れられない居場所だった。

番外通行は踵を返した。

ただ、言えたのは「ミサカ、散歩してくる」という無愛想な文だけ。

番外個体は、ただひたすら街に飛び出した。

１－１　番外個体と一方通行。（後書き）

感想や評価頂けたら嬉しいです！

1―2　番外個体、お姉様に会う。

あてがあった訳ではない。だが、電磁波につられるようにふらふら歩いていなかったかと言われればそうなのかもしれなかった。
まあ有り体にいえばお姉様（オリジナル）に会った。

「あ……」
「……え」

二人の声は重ならず、吐いた言葉も違ったが、声質だけは同じ。当たり前だ。番外個体は御坂美琴のクローンなのだから。
御坂美琴は固まり、番外個体はその姿を内心せせらわらう。

「……ひゃっほう。お初にお目にかかりましてってとこかな？ミサカは第三次計画、妹達の次に作られた一方通行を殺すために作られたあなたのクローンだよ」

まず番外個体が口を開いた。お姉様はぽかん、と口を開け番外個体の顔をまじまじと不躾に見ている。

（――ま、しょうがないか。この人にとってミサカは悪夢の再来みたいなもんだからね）

番外個体はそう結論付け、御坂に背中を向け去ろうとしたところを――腕を、捕まれた。
お姉様は、まだまじまじと自分を見ていた。

（さあ、何が来るかな？罵倒？第三次計画についての説明？何にしろ、構わないけれど）

番外個体は心の中でにやにや笑っていたが――お姉様が放った言葉は予想に反した言葉だった。

不意討ち、とでも言うのか。

「……アンタ、他の妹達より表情が豊かなのね」

「……は？」

番外個体が今度はぽかんと口を開ける番だった。余りのズレた言葉に脱力している番外個体の体を「ここじゃなんだから喫茶店にでも」とその体をずるずるとお姉様は引っ張っていく。

歪んだ姉妹の初対面の主導権は、結構お姉様の方にありのかもしれなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……というワケ」

「成程ね……」

番外個体は自分の今までのことを全て洗いざらい吐いた。この少女を見てると、嘘をつくのが馬鹿馬鹿しいと思ったからだ。

御坂は溜め息をついて――番外個体の瞳を見つめた。なぜかぐ、と息がつまる。

「……私は、アンタに謝罪するべきよね。私のせいで、またアンタみたいなのが生まれてしまった」

「……いや、どちらかと言えば一方通行に非があるけどね。ミサカの場合。でもまあ、謝罪は必要ないと思うけどなあ」

番外個体は水を一気に飲み干した。

「むしろ……感謝してるよ第三位。ミサカに命を与えてくれたのは他でもないあなただからね」

「……、本人に言われると重さが違うわね」

「？」

お姉様は番外個体の手をとり――番外個体は一瞬ピクと拒絶しかけたものの何もせず――それから、笑った。

それは、罪を背負い続けた罪人が、ようやくそれを取り外したような、安堵の顔。

「あり、が……とう」

お姉様の言葉にやはり番外個体は息を詰まらせた。

（チクショウ、ミサカこの人苦手過ぎる……）

「そういえば、アンタ学校通ってないんでしょ？」

「学校……？ミサカ学校通えないもん。戸籍ないし」

番外個体がちょっと拗ねたように―多分家を飛び出した理由を思いだし――言うと、お姉様はそっか……と数秒考え込み、

「じゃ、学校通おうか」

「何で！？話が一切繋がってないよお姉様！？」

「繋がってないこともないわよ。それにあれじゃない。あの子達な

らともかくアンタの場合私の姉に見えるからね……大丈夫」
「ミサカ何が大丈夫か分かんない！」

ダーン！と番外個体は勢い良くテーブルを叩く。周りの客の視線が此方に集まったことに苛立ちを混ぜて舌打ちする。

「まーまー落ち着きなさいよ。とりあえず、学校にいく気はあるわよね？」
「確認じゃなくて強制なとこに流石ミサカのお姉様と思いつつまあるけど……ミサカ、戸籍ないし」
「ふむ、そっか」

話聞いてるのかこの尼、と一瞬紫電を撒き散らしそうになったが、どうせお姉様の圧勝なのでやめた。
お姉様は番外個体に良く似たにやにや顔で、こう言った。

「なら、バンクに情報書き加えればいいのよね」
「ミサカ、今から超不正な現場を見る気がする！！ッ」

直後、学園都市第三位の力がバンクに炸裂した。

１―２　番外個体、お姉様に会う。（後書き）

やっほーい、美琴×番外個体の会話、ていうか美琴×シスターズ全般との会話、好きすぎます。なんだかんだで仲いいですよね、この姉妹達。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9768y/

とある平和の番外通行

2011年11月29日21時52分発行